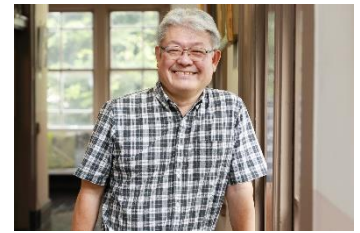


理事長エッセイ

燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや

(えんじゃく いづくんぞ こうこくの
こころざしを しらんや)



公益社団法人日本畜産学会
理事長 小澤 壯行

～小さな鳥には見えぬ、大いなる飛翔への想い～

「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」という言葉は、視野の狭い者には大きな志や遠大な理想が理解できないという、古代中国の故事に由来するといわれています。ここではその「鴻鵠」を、私たち公益社団法人日本畜産学会になぞらえ、大いなる未来を見据えた飛翔の想いを綴らせていただきます。2023年4月より理事長を拝命し、私をはじめに掲げたのは「産学の一体化」と「外部理事制度の導入」の二本柱でした。産業界と学术界が手を携えることで、畜産の研究・技術が一層進化し、広く社会へ貢献できる体制を築くことが私どもの大いなる飛翔、すなわち“鴻鵠の志”であると確信しております。一方で、こうした志を形にするには、規約の整備や多様な意見の摺り合わせなど、なかなか一朝一夕には進まない課題もあるのが現実です。

実際、当初から力を注いできた「外部理事制度の導入」に関しては、いまだ具体化に至っておりません。しかし、近ごろは内閣府からのご指導もいただき、早急に外部の視点を積極的に取り入れるよう求められているところです。視野を広げるには、やはり外部の声は必要不可欠。小さな鳥の目線で終わらず、大空を舞う鴻鵠のように大きな視座を得るためにも、これからの残り任期で粘り強く制度設計を進めてまいります。

当学会は昨年、創立100周年という節目を迎え、京都大学で盛大な記念式典を執り行うことができました。農林水産省や中央畜産会、全農の皆様をはじめ、産業界との結びつきもいっそう強化され、私どもの「産学一体化」への道筋がよりくっきりと見えはじめたように感じています。

運営面では、35年ぶりとなる会費の値上げを断行し、年会費を8千円から1万円へ引き上げました。これはまさに断腸の思いでしたが、学会の活動や学術誌の継続的な発行を支えるため、どうかご理解とご協力を賜りたいと存じます。また、和文誌『日本畜産学会報』の冊子体発行の見直しについても、会員アンケートの結果をもとに進めているさなかです。より多くの読者に効率よく情報

をお届けするにはどうすればよいのか。デジタル化は避けて通れぬ道かもしれませんが、昔ながらの紙のよさを大切にしたい声も大きく、まさに頭を悩ませているところです。

英文誌『Animal Science Journal』の掲載料についても、現在Wiley社との粘り強い交渉を重ね、学会ならびに投稿者の負担軽減へ向けた糸口を探しております。産官学の連携が深まる今こそ、海外へ向けた情報発信の舞台をしっかりと整備することが、世界に羽ばたく鴻鵠たる当学会の責務であると考えています。

私の任期は2025年4月までと限られておりますが、この限られた時間だからこそ、学会としての「大きな飛翔」を具体化するために最後まで全力を尽くします。小さな鳥の目に映らないほど高い場所を目指してこそ、私たち日本畜産学会の理想や使命は輝きを増すのではないのでしょうか。引き続き皆様のお力添えをいただきながら、鴻鵠の志を胸に、畜産の未来を切り拓いてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【いつものお願い】

皆さま、見落としとしていらっしゃるかもしれませんが、学会HPのバナーに「畜産用語辞典」があるのをご存じでしょうか。かつては冊子版として養賢堂から刊行されていたこの辞典が、現在は最新の内容を取り込みつつ、Wikipedia形式で更新されています。畜産学の最新情報を簡単に調べられるだけでなく、どなたでも無料でご利用いただけるのが大きな特長です。これは公益法人としての学会が取り組む社会貢献活動の一環でもあります。ぜひ一度、学会HPのバナーをクリックしてご確認ください。

